三ケ峯第６号窯・第７号窯
範囲確認調査報告書

長　久　手　町　教　育　委　員　会

三ケ峯第６号窯・第７号窯
範囲確認調査報告書

長　久　手　町　教　育　委　員　会

第１章　調査の概要

１．調査期間

平成２０年　３月　１８日～平成２０年　３月　２１日

２．調査箇所

愛知県愛知郡長久手町大字岩作字三ケ峯地内

３．調査面積

約　５２㎡

４．調査主体

長久手町教育委員会

５．調査担当

監　督　員	長久手町教育委員会　社会教育課	加藤紀子
調　査　員	株式会社イビソク埋蔵文化財本部	松田　繁

６．調査指導

愛知県教育委員会	生涯学習課文化財保護室	原田　幹
瀬戸市交流活力部	文化課　文化財係	服部　郁

第２章　調査の方法

本調査は、埋蔵文化財の包蔵地として周知していた愛知県愛知郡長久手町岩作地内にて、遺跡範囲確認調査として行った。現地は県道田籾名古屋線の西側で、丘陵上にあたる。（第１図）周知の埋蔵文化財は、三ヶ峯第６号窯、および三ヶ峯第７号窯が確認されている。

三ケ峯第７号窯跡は、すでに窯壁がむき出しになっている箇所があり、焼台が表採できる地点があった。そのため監督員の立ち会いのもと、６本のトレンチを設定して窯体の規模、灰原の広がりを確認することとした。

三ケ峯第６号窯については、地点が明確に把握されておらず、窯の存在自体があるかどうか不明であった。そのため、約 10 年前に調査地域で大規模な土取りがされた際に、灰層と思われる黒色土層を確認したとされる地点に、６本のトレンチを設けた。

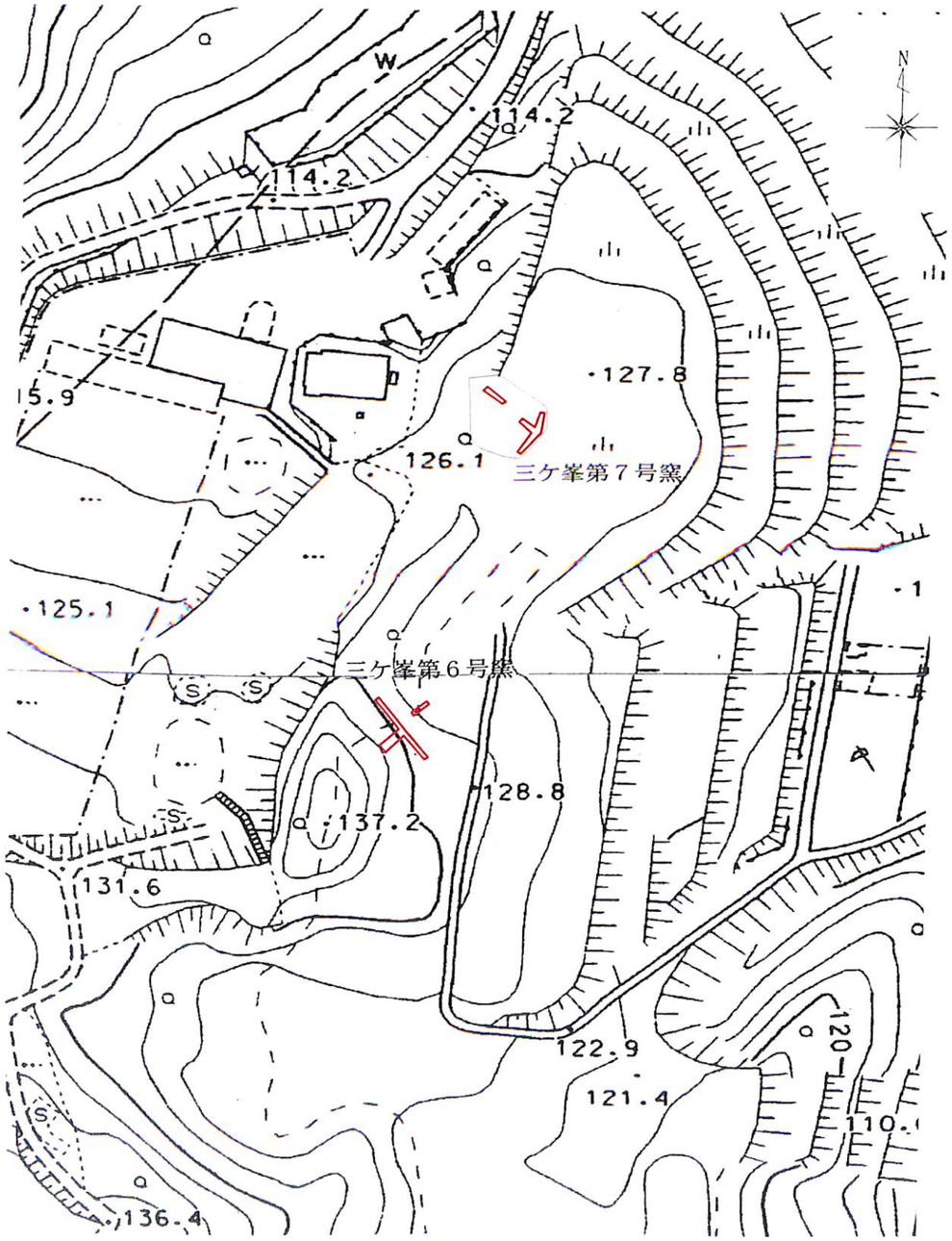
【　調　査　日　誌　】

３月１８日（火）晴れ
調　査　箇　所　：１トレンチ・２トレンチ・３トレンチ・４トレンチ
記録写真及び実測：１トレンチ・２トレンチ・３トレンチ

３月１９日（水）曇りのち雨
調　査　箇　所　：２トレンチ・４トレンチ・５トレンチ
記録写真及び実測：１トレンチ・３トレンチ・４トレンチ・５トレンチ

３月２１日（金）晴れ
調　査　箇　所　：６トレンチ
記録写真及び実測：５トレンチ・６トレンチ

第１図　調査位置図　（縮尺：1/25000）

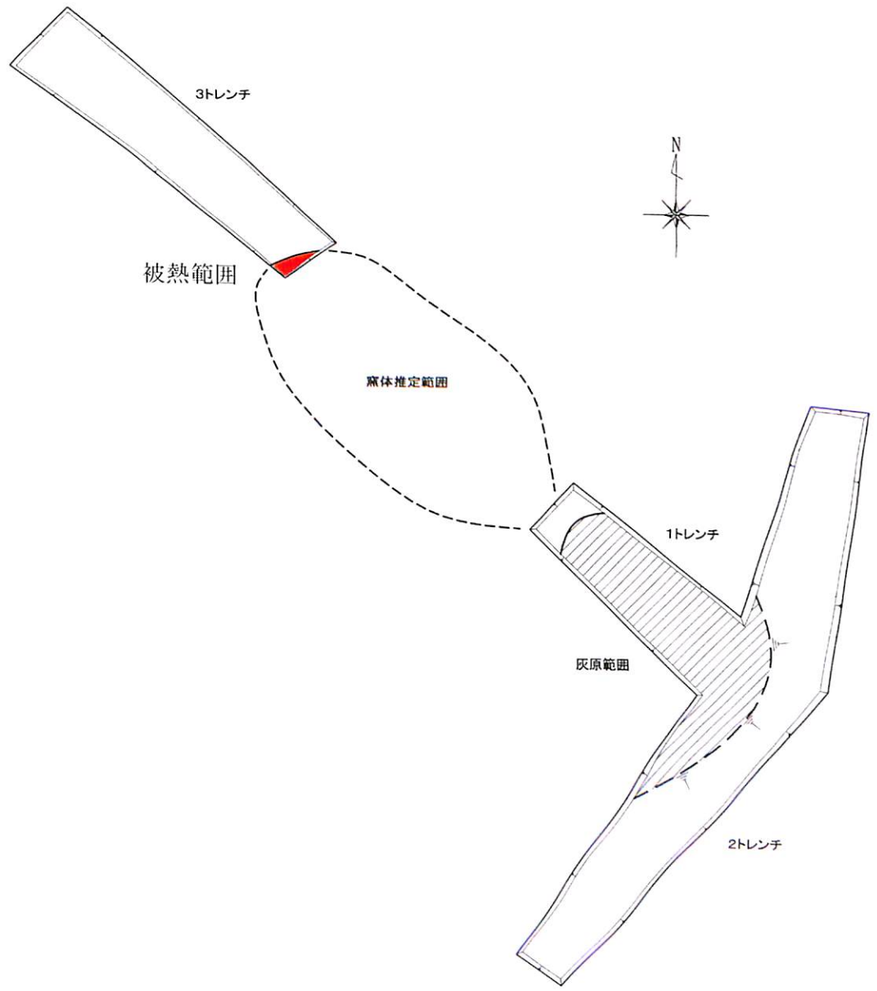


第２図　グリッド配置図　（縮尺：1/1500）

第３章　調査結果

【三ケ峯第７号窯】

三ケ峯第７号窯は、県道田籾名古屋線の西側丘陵に位置する。窯の東、南側は土取りのために大きく削平され、その後で土が盛られている。現況で、天井が遺存する窯が露出しており、窯体の規模と灰原の範囲確認のためにトレンチを設定した（第３図）。トレンチ掘削には重機を用いて行い、人力で精査を行った。以下に各トレンチの様相を概説する。



第３図　１・２・３トレンチ平面図　（縮尺：1/100）

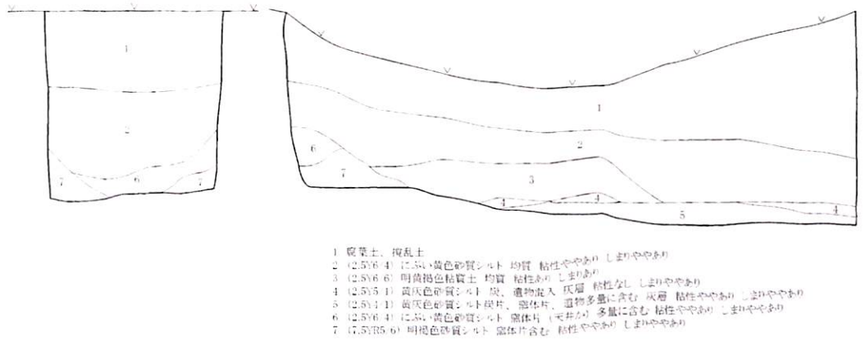
１．１トレンチ

前述のとおり、調査前の段階ですでに窯壁の一部が露出していた。そのため、窯の焚口部分の確認および灰原の始まりを押さえることを目的として、窯体の中軸に沿うようにトレンチを設定した。

表土および撹乱層を除き、黄灰色砂質シルトを掘削したところで、トレンチ北西端から、焚口付近と思われる明褐色の窯壁片がブロック状に混入する層を確認した（第４図第６層）。また、そのすぐ南からは、窯体片、炭片、遺物が多く混入する灰層が面的な広がりで確認された。灰層は、トレンチ範囲のほぼ全体に広がりをみせ、トレンチの北西端から４．５ｍ付近で撹乱土のために削平されていた。

トレンチからは、灰層から山茶碗、小皿が出土した。時期は 13 世紀（第６型式～第７型式）(註 1)の遺物と考えられる。

写真１　１トレンチ完掘状況　南東から



第４図　１トレンチ北西・北東壁断面図　（縮尺：1/40）

写真２　１トレンチ断面状況　南西から

２．２トレンチ

１トレンチの結果から、灰層が土取りによる撹乱を受けていることを確認したため、その範囲を明確にするために設定したトレンチである。灰層の幅を確認するために、１トレンチに直交するように設定した。

１トレンチ南東端から北に広げたところ、１ｍにも満たない地点で撹乱による削平を確認した。また、同じく南に広げたところ、２ｍ付近で同様に撹乱による削平を確認している。さらに、灰層の厚さを確認するために北側で削平後の盛土を掘削した。灰層の厚さは５～10ｃｍで、１トレンチ同様に２層に分かれる。

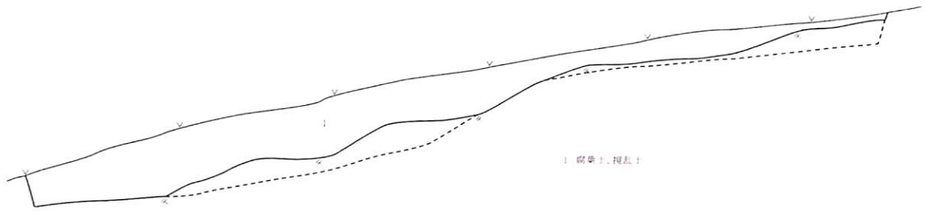
トレンチ内からは、山茶碗、小皿が出土した。いずれも灰層表面からの出土である。遺物の時期は、13 世紀（第６型式～第７型式）(註 1)と思われる。

写真３　２トレンチ完掘状況　北東から

写真４　２トレンチ灰層断面状況　南東から

３．３トレンチ

窯体の煙道部など、窯体の規模の把握と、周辺施設の確認のために設定したトレンチである（第５図）。場所は、１トレンチの延長上で、丘陵の最頂部から尾根の反対側にかけて設定した。掘削の結果、表土直下で地山面を検出し、最頂部で地山に被熱面を確認した。赤褐色に被熱した層の内側に還元された暗青灰色の層が確認できたことから、煙道やダンパーといった施設ではなく、窯体の床面の一部と考えられる。床面の断面が最頂部で確認されたことから、窯の構築時には丘陵が現況よりも北側がさらに高かったと推測される。遺物は、表土層から山茶碗片を採集している。小片ばかりではあるが、１・２トレンチと同時期のものと考えられる。



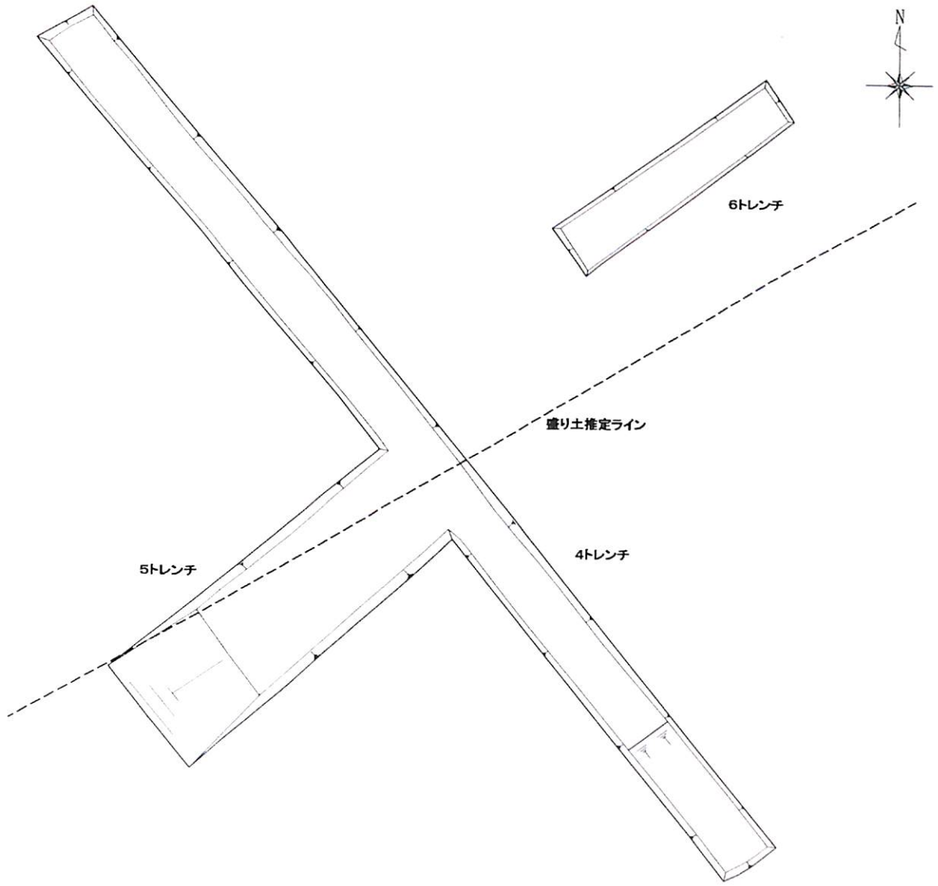
第５図　３トレンチ北西壁断面図　　（縮尺：1/40）

写真５　３トレンチ完掘状況　北西から

写真６　窯体検出状況　北西から

【三ケ峯第６号窯】

三ケ峯第６号窯は、第７号窯と同様、県道田籾名古屋線の西側丘陵に位置する。窯体、灰層については、平成 10 年 10 月の土取りによって半壊したとされているが、その際に写された写真に灰層と思われる黒色の層が確認されている（写真７・８）。そのため、今回はその有無、また、窯体の残存状況の確認を目的にトレンチの設定を行った。トレンチの配置については、前述の写真、土取り時に確認されている第６号窯の位置を記載した地図、及び現況の地形を考慮した上で、まず斜面に対して平行に設定し（４トレンチ・第６図）、その結果をうけて斜面に対して垂直方向にトレンチを拡張する（５・６トレンチ）方法を取った。トレンチ掘削は重機を用いて行い、人力で精査を行った。以下に各トレンチの様相を概説する。



第６図　４・５・６トレンチ平面図　　（縮尺：1/100）

写真７・８　平成 10 年 10 月 26 日付写真（灰層）

４．４トレンチ

三ケ峯第６号窯の灰原の有無と、その範囲を確認するために設定したトレンチである。調査前に土取り時の写真等で検討し、推定箇所付近の斜面に並行するように長めのトレンチを設定した。掘削の結果、５～10ｃｍの表土直下から地山面を検出した。また、南半分は土取り後に積まれた盛土で、地山直上から配電盤やタイルを掘り出している。

遺構、遺物は、ともに全く確認されなかった。

写真９　４トレンチ検出状況　北西から

５．５トレンチ

４トレンチの結果から、灰層を確認するために盛土と地山の境付近に設定した。位置は４トレンチから南西に盛り上がる丘陵で、斜面に直交するように設定した。掘削の結果、４トレンチを設定した平坦面から２ｍほど上方まで掘削したが、表土直下で地山を検出するのみで、窯体、灰層など窯跡に関連する遺構を確認することは出来なかった。

遺物については、全く確認することは出来なかった。

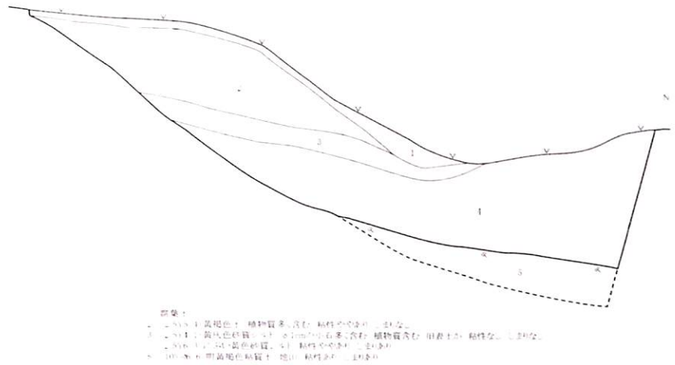
写真 10　５トレンチ断面状況　北東から

6．6トレンチ

5トレンチと同じく、灰層の確認のために設定したトレンチである。5トレンチから北東に向かって延長し、樹木を避けた位置に設定した。掘削の結果、表土下50ｃｍの所で黄灰色のシルト層を確認した（第７図第３層）。土層観察の結果、窯体片、炭片、遺物等は全く出土せず、植物質を含むことから、旧表土と考えられる。この層の下層では、40ｃｍほどにぶい黄色シルトが堆積した下から地山が確認されている。

掘削土からは遺物は全く確認されなかった。

写真 11　６トレンチ完掘状況　北東から



第７図　６トレンチ北西壁断面図　（縮尺：1/40）

写真 12　６トレンチ断面状況　南東から

第４章　小　結

試掘調査の結果、第７号窯についてはその概要を大方把握することができた。まず、１トレンチ、３トレンチの結果から、窯跡本体の残存状況をつかむことができた。１トレンチ北西端の焚口から、３トレンチ南東端で確認した床面までの長さが約６ｍであることから、本来の第７号窯の規模はおおよそ全長８ｍほどであろうと推測される。また、灰層については、２トレンチの調査結果から、焚口から４～５ｍ付近より南側については、土取りによって削平されていることが確認された。２トレンチ内にて土取り後の盛土を掘削したが、灰層検出面より50ｃｍほど掘削したところでも地山を確認することが出来なかった。このことから、２トレンチで確認した灰層より南側では、灰層はほぼ滅失している可能性が高いことが分かった。窯の時期は、灰層直上から出土した山茶碗から、13 世紀（６型式～７型式）(註１)と考えられる。

なお、本窯の南西に、現況で尾根筋がやや広がった平坦面を確認することが出来る。また、３トレンチ南西部に北西方向の谷筋が存在するが、ここにも若干の平坦面が見て取れる。現況からの判断ではあるが、南西からの尾根筋が残存しているとすると、これらの平坦面については、作業場として利用した可能性も考えられる。

写真 13　７号窯出土遺物

一方、第６号窯については、試掘トレンチを３か所調査したもののその存在を確認することはできなかった。４トレンチ、５トレンチについては、いずれも表土直下で地山を検出した。窯体、灰層、周辺施設等の遺構は検出されず、窯体片や炭片、山茶碗といった遺物も一切出土しなかった。６トレンチでは黄灰色層を確認した。当該層は、窯体片や炭片、山茶碗といった遺物が全く確認できない上、植物質（腐葉土）が若干ながら混じっていたことから、灰層とするには条件が乏しく、旧表土と考えられる。第６号窯については、周辺を踏査しても遺物片が一切確認できず、今回の試掘調査でもトレンチ内から遺物を確認することはできなかった。このことから、第６号窯については、今回の試掘調査地点以外に存在するか、あるいは土取りによって完全に滅失したかのどちらかの可能性が考えられよう。

以上の結果から、三ケ峯第７号窯は残存長６ｍの窯体と灰層が残存し、周辺の平坦面は作業場の存在の可能性が考えられる。第６号窯については、現段階では、試掘調査範囲に窯体、灰層が存在する可能性は低いといえる。

註１）藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第３号』1994　による

三ケ峯第６号窯・第７号窯

範囲確認調査報告書

平成 20 年 3 月 28 日発行

発行　長久手町教育委員会
〒480-1196　愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内 60 番地 1
編集・印刷　株式会社イビソク
〒503-0854　岐阜県大垣市築捨町３丁目１０２番地

長久手町中央図書館
02411216